障害

高崎市立八幡中学校
三年　芝田　夏瞳

みなさんは、障害をもつ人のことを、どう思いますか。自分たちとは違う、可哀想などと障害者と健常者の違いを考える人が多いと思います。ですが、そのような考えや冷たい視線が障害者やその家族を時に苦しめています。

私には発達障害の弟がいます。読み書き、計算、人とのコミュニケーションなど、私たちが普段できてあたり前だと思っていることも、弟にとってはとても難しいことです。思い通りにできないことがあると、黙り込んでしまったり、泣き出してしまったりします。ですが、弟はいつも明るく、笑顔で、私達家族に元気をくれる存在です。

そういった中、障害者に対する差別や偏見を身近で感じることが多々あります。地域のお祭りに行った時のことです。自分達の住む地域なので、心配する必要はないと思い、弟にあまり手をかけていませんでした。すると、弟は何か欲しい物があったのか、お店の方へ走っていって、中をずっとのぞきこんでいました。その時、お店の人は、弟が見ていたものを隠し、周りにいた人達は、弟を何か珍しい物でも見るかのような目で見ていました。私は恥ずかしいという一心で、弟をその場から遠ざけ、「あんなことはしないで。」と怒りました。しかし、後から考えれば、弟は何も悪いことなどしていないのに、周りの人はなぜ弟をじろじろ見たのかという疑問と弟を叱ってしまった後悔が残りました。もし、健常児の子が弟と同じことをしていたら、お店の人は物を隠し、周りの人はその子をじろじろ見るでしょうか。私はそうは思いません。私自身、弟のことを理解しきれず、友達に障害のある弟がいることを知られるのが嫌だと思っていた時期がありました。ですが、両親に、「障害のある弟がいるからこそ、あなたは障害について深く考えて、差別や偏見の無い

心を持つことができるんだよ。」と言われたことが支えとなり、もっともっと弟のこと、障害のことを知っていこうと思いました。それ以降、弟のことを恥ずかしいと思うこともなくなりました。

そして、もう一つ、私の考えを大きく変える出来事がありました。それは、弟の通う特別支援学校の運動会を見に行った時のことです。そこには、ダウン症、自閉症、視覚・聴覚障害の子や車いすに乗っている子、日光アレルギーの為、全身に防護服を着ている子など、それぞれ様々な障害を抱えた子がいました。みんな一生懸命に走ったり、踊ったり、また、「来てくれてありがとう。」と笑顔で私に話しかけてくれたりする子もいました。この時、私が一番に感じたことは、障害をもつ子にとって、障害を理解してくれる人が最も支えになるということです。実際、学校の先生方は、いつも笑顔で優しく、どんな時も子供達に寄りそってくれていました。周りの人、周りの環境が、障害をもつ人にとって、とても大切だということを改めて感じるきっかけとなりました。

私はこの作文の中で、何度も「障害」という言葉を使ってきましたが、本来、その言葉もあまり使いたくはありません。なぜなら、その言葉も差別や偏見ととらえる人がいるかもしれないからです。私も、弟のことを単に障害者と言われてあまり良い気はしません。

差別や偏見は昔から世界中で問題になっています。人種差別、障害者差別、いじめ、最近ではコロナ差別という言葉もよく聞きますが、特定の人達に対する差別や偏見はそう簡単には無くすことができない問題だと思っています。しかし、全てにおいて、知識や関心を少しでも多くの人達が深めることができたら、完全に無くせなくても、差別や偏見によってできた溝を少しずつ浅くしていけるのではないでしょうか。今すぐに障害者のことを理解するのは難しいことだと思います。ですが、これから少しでも障害のことに関心をもって欲しいなと思います。私もまだ足りない知識をこれからもっと深めていこうと思います。私たちの力で差別や偏見で苦しむ人を減らしていきましょう。